

1990年代後半から現在までの中国における ナショナリズムをめぐって(1)

齊 藤 泰 治

ナショナリズムは中国語では「民族主義」である。「民族主義」という語は、梁啓超が1901年に発表した、ヨーロッパの国家思想の変遷について述べた《国家思想変遷異同論》に見られる。孫文の三民主義にも「民族主義」があり、この両者を近代中国における「民族主義」の2つの源流とする考え方がある⁽¹⁾。

中国の研究者によるナショナリズムの定義は多岐にわたる。たとえば、王逸舟は次のように定義している。「ナショナリズムは一種の思想的に強烈な、通常すでにイデオロギー化されている、民族間感情である。それは時に一種の状態として民族内の各個人の忠誠と恩に報いる情熱を引き寄せ、時に一種の系統化された理論と政策となり、実際の民族の成長過程に原則と観念を提供し、時に一種の運動のスローガン、象徴となって民族国家を支持あるいは分裂させる、大きな作用を果たす。それは多種の変形があり、すべては具体的な条件と場合によって決まる」⁽²⁾。

80年代末から90年代初めにかけて、中国政治は転換点を経過し、社会思潮も複雑化した。中国社会の転型と経済発展を背景に、90年代後半から自由と公正をめぐって自由主義と新左派の論争が起こった。この時期は、90年代前半、天安門事件から数年を経た中国が、改革開放の堅持を謳い、潜在的可能性を背景に国際社会との新たな関係を築こうとし、経済成長が始まった時期でもあった。この他にもさまざまな論争が起こっている。しかし、いずれの論争も影の主役はナショナリズムなのかもしれない。

対外的な接触が増え、以前とは質的にも異なる交流が始まると、正反両面について、それまで存在しなかった、あるいは明らかになっていなかった諸問題

が顕在化することとなった。また、たとえば中国企業にとって、かつての「距離のある模倣の対象」⁽³⁾だった外国企業との「距離」も微妙に変わってきた。こうしたことが社会の各面で起こっており、実体を伴う中国の変化として認識される中で、感情や意識の面で大きな変化が起こりつつある。この変化は一方的なものではない。

このような状況の中で、この時期にナショナリズムをめぐる諸問題が顕現したというのは理解できない成り行きではなかった。「長期にわたり、知識界の主流は注意深くナショナリズムの話題を避けていた。しかし、時間の推移と中国の開放の程度の拡大に伴い、外部世界との往来、衝突が日増しに増加し、20世紀90年代中後期、ナショナリズムの運動と理論言説は次第に中国知識界さらには一般大衆に注目されるようになった」⁽⁴⁾。

90年代から現在に至るまで、実はナショナリズムをめぐる明確な論点で激しい論争が起こるという状況ではなかった。一部の論文をめぐる論戦が行われたことはあるが、どちらかというと、いわゆるネット世論を含めてナショナリズムないしは愛国主義的傾向が一部に広がっていった、それに対して部分的な批判が出てきているというのが実際の状況に近い。ナショナリズム的な見解に対して、批判のほうが微弱である。

「現在の国際環境と時代背景の中で、中国が開放されればされるほど、ナショナリズムの土壌は消えるどころか肥沃になった。開放、西洋（原文は「西方」＜以下、同じ＞。「西洋諸国」、「西側資本主義諸国」）との関係はナショナリズムの促進剤になった」⁽⁵⁾という認識すら存在する。知識人の中の論争というよりも、社会一般に広がっている傾向とそれを警戒する一部知識人という構図である。

2004年夏に出版された《潜流》の「編者の言」で編者は「編者の限られた視野では、狭隘なナショナリズムに対して系統的に理性的に深く分析、反省した著作は極めて稀で、これは明らかに不正常である」と書いているが、現在の状況をよく示しているといえよう。

ナショナリズムと愛国主義についての議論は中国でも見られるが、両者それぞれについて、あるいは両者の関係について定義するとすると、ある程度の理解の幅が存在している。ナショナリズムと愛国主義に関して、王小東は甘陽によるイギリスのKenneth Minogue の記述の引用を再引用し、「愛国主義は……外来の侵略に抵抗して現実に存在する祖国を守ること、ナショナリズムは祖国が達成していない理想の目標を実現するために尽力する」⁽⁶⁾ こととしている。

「理論的に愛国主義が強調するのは感情と意識のレベルの内容で、民族主義思想は、(1)本民族に対する強烈な忠誠、愛国主義的感情、努力と原則、(2)政治、経済面で本民族の利益を核心とする主張と原則という2つの面の内容を包括する」⁽⁷⁾とされるが、「中国の状況では、現代的意味で、愛国主義とナショナリズムは異なる土壌に存在したことがない」⁽⁸⁾とすれば、この両者は共通の感情、認識から生まれているということである。「政治の言語環境では、愛国主義とナショナリズムはしばしば互換可能、あるいは同意語であり、愛国主義とナショナリズムを区別しようとすることに実際的な意味はない。なぜなら、両者の核心的な問題は国家に対する集団的忠誠と集団忠誠の作用の下での集団行動だからである」⁽⁹⁾といった割り切った考え方もある。

このようなナショナリズムの思潮は「学術の範囲を超え、社会における影響力はその他の学術理論をはるかに超えている」⁽¹⁰⁾といわれるほど、広範な問題になっている。自由主義、新左派をめぐる論争などが知識人内部での論争といえるのに対して、ナショナリズムは一般庶民も巻き込むものである。

余建華はナショナリズムには三重の含意があると指摘している。それはすなわち、(1)心理状態あるいは思想観念、(2)思想体系、イデオロギー、(3)社会实践と大衆運動である⁽¹¹⁾。これをもとにしてみると、この3つのレベルの中で(1)と(3)、中でも(1)は共同体のメンバー内に普遍的に存在するもので、従来知識人が担ってきた(2)をはるかに凌ぐ基盤が存在することになる。とくに(1)、(2)を分析する場合には、そこに影響を与える存在として教育やメディアに対する研究なども不可欠となる。

はっきりと目に見える形で行動に表れる場合もあり、それが注目されやすいが、具体的な形にならなくても、程度の差こそあれ、一種の情緒として広範囲の人びとに沈殿しているといった性質を持ち合わせている。

徐迅はナショナリズム一般の分析として「政治権力としてナショナリズムは特殊な社会動員、社会制御の方式として現れ、社会政治運動としてナショナリズムは現代民族国家（国民国家）を促進し、イデオロギーとして民族国家化間の精神、文化、身分の障壁を築く」⁽¹²⁾、「国家は民族とイコールではなく、政府も国家とイコールではなく、政党はさらに人民とイコールではない。しかし、ナショナリズムイデオロギーにおいては、国家、民族、政府と人民といった概念は混合して複雑なナショナリズム感情となる」⁽¹³⁾と記述している。民衆のナショナリズムと国家の関係は複雑である。両者が一致している場合はともかく、両者の間に乖離が生じたとすれば、中国においてはどのように処理されるのか、具体例に即した検討が必要である。

「知識人は1つの階層として歴史的にナショナリズムイデオロギーの創造者と解釈者の役割を担ってきた」⁽¹⁴⁾とされるが、90年代中期以降、たとえば、メディアの発達などにより、知識人、民衆にどのような影響がもたらされているのか、旧来の分け方が実質的に崩れ始めているのはどの部分か、などについて、現状を把握する必要があるだろう。

本稿では、中国のナショナリズムに関して理論的にどのような分析がなされているのかを徐々に明らかにしたいと考えている。日本でもこの問題をめぐっては近年多くの論考が発表されているが、ここではこの問題を中国の論者がどのようにとらえているかについて、中国で出版されている資料をもとに、現実的な問題にも一部触れつつ、主として理論面から概観してみたい。

1. 90年代の中国のナショナリズムの特徴

90年代からの中国のナショナリズムはどのような背景から生まれたのか。「国内ナショナリズム思潮出現の直接の動因はソ連・東欧の激変である」、「伝

統的なイデオロギーが衰退し、社会矛盾と危機が深刻化する状況下で、政治、社会の解体が停滞、保守よりも深刻な危険」をはらんでいた状況でナショナリズムが提起された、と孫立平「匯入世界主流文明—民族主義三題」⁽¹⁵⁾は指摘している。また、「中国政府の合法性再建の訴え」⁽¹⁶⁾との見方もある。さらに、次のような指摘もある。「1989年の流血の政治衝突は社会上、とりわけ青年学生の中に深刻な対立感情を出現させ、それによって、現実の中の民族、国家の代表の政権と疎遠になり乖離する傾向が生まれた。このとき、社会は新たな集合力を差し迫って必要とした。当時の、高度に政治化、イデオロギー化した社会衝突の後、民族感情、愛国主義は、当然、社会衝突を弥縫し、人心を再結集するもっとも伝統的で適切な役割を果たすものとなった」⁽¹⁷⁾。《潜流》は「狭隘なナショナリズムに対する批判と反省」の書であり、《論民族主義思潮》は中国ナショナリズムの研究者によるものである。

これらはわずかな例であるが、多くの論者が、80年代末期から90年代初めにかけての国際情勢と愛国主義またはナショナリズムの提起との間に因果関係を認めているといえることができる。

このような状況の中で、中国の人びとの対外認識は80年代と様変わりし、社会における変化と連動しながら、対外関係においてさまざまな問題が発生した。その背景として、中国のナショナリズムが注目されるに至っている。

許紀霖によれば、90年代の中国のナショナリズムは「反西洋主義」と結びついた形で現れた。1994年のポスト植民文化批判とともに、96年の《中国可以说不》の出版が象徴的な出来事である。許紀霖によれば、「ナショナリズムは中国では巨大で空洞化した記号であり、激情が横溢する愛国情緒が徒に存在するのみで、安定した、持続的な、共同体の人びとに基本的に認められるような価値体系、社会制度と行動規範に欠けている。建設と同意が差し迫って必要とされる実質的内容こそが、中国のナショナリズムにもっとも欠けているものである」⁽¹⁸⁾。ここにおいて示されているのは、中国ナショナリズムの特徴が情緒先行で、実質的内容が空虚だということである。

これに対して、中国におけるナショナリズムは空洞化してはならず、実体を伴っているという考え方がある。90年代の中国のナショナリズムが国際的に注目されていること自体が「空洞化した記号ではないことの反証ではないか」、「少なくとも、冷戦終結後の『自由世界』イデオロギーの新しい相手となった」⁽¹⁹⁾というのがその根拠である。

ナショナリズムは最初から他の思想体系によって補充されるのが前提であるとの考え方がある。それによれば、「空洞化している」と考えるのは、「ナショナリズムとは一定の社会、政治秩序にもっとも基本的な枠組みを提供するにすぎない、つまり、他の思想体系や各利益共同体の特定の状況によって補充されるべきものであるとの特徴を理解していない」⁽²⁰⁾ということになる。しかし、空洞化論者は空洞化している部分が情緒的に肥大化していることを問題にしているのである。思想体系を情緒化する要素としてとらえ、そのことの問題点に懸念を示しているのである。いまだ「実」が盛り込まれていないとすれば、そこに何を盛り込むのかという議論については後述する。

現在の中国のナショナリズムの特色について、若い世代の反応も取り上げられている。「当代中国のナショナリズムは西洋の反中国勢力が頑固に冷戦思考を堅持し、中国の社会主義建設を阻止し、中国人民の感情をたえず辱め傷つける前提の下で発生した。たえず膨張する中国封じ込めの野心に直面して、中国人民、とりわけ、若い世代が反応した。このような反応がナショナリズムと呼ばれる」⁽²¹⁾。

自信と自尊心を取り戻す一方で、それが強さを増すことも、ある意味では自然の勢いなのかもしれない。「屈辱の歴史と長期の貧困によって窒息していた民族の自尊心と自信も急速に回復した。しかし、注意すべきは、このような条件の下で回復した民族の自信と自尊心は一部の人びとの中で膨張心理になってしまったということである」⁽²²⁾との指摘がある。

たとえば、「憤青」という言葉で表現される人びとはそのようにして生まれてきたのであろう。《国際先駆導報》2004年121期では、「憤青調査、愛国か誤

国か」、として記事にしている。「憤怒的青年（同記事によれば、必ずしも青年でなくてもよいようだ）」、英語はultranationalist。憤青には、反日、反米憤青、反米憤青の分派、台湾強硬派などの種類があるという。90年代後半の数年間には反米が目立った。《国際先駆導報》の記事は憤青に対して批判的な論者のコメントを取り上げている。《中国青年報》（2004年11月12日）は上記の《国際先駆導報》の記事に対して「憤青誤国論弁別・分析：1つの声しかないのは危険だ」を掲載、「憤青」に急進的で過激な一面があるにせよ、それを抑えるのは思想の禁錮になる、として、「憤青誤国論」に異を唱えている。《国際先駆導報》は2004年第123期でも「“憤青”にならず、“奮青”になろう」を掲載、社会的な関心も高いのであろう。この「青年」たちは、インターネット世代でもある。

《論民族主義思潮》によれば、現在の中国のナショナリズムは「受激型」と「反思型」から成っている。前者は「西洋の対中政策と国内の政策実践が全球化の過程においてたえず中国のナショナリズムの発酵を促した」ことから刺激を受けて生まれたナショナリズムであり、反思型とは、1980年代から始まった「英米を師とする」実践において現れた疑問から再検討することによって生まれたナショナリズムである。つまり「これらの疑問は西洋の対中政策、文化価値観、制度システムなどの面に集中し、現代中国のナショナリズムが『西洋式現代化』モデルに対して反省を行う精神的要素となった」⁽²³⁾のである。

90年代後半の中国ナショナリズムの特徴は、第一は、中国が関係する国際的な事件に対する反射的反応をきっかけにして起こっているということである。第二に、経済成長をばねに国際関係において影響力を増し、自信をつけている中で強まってきたことが挙げられる。中国のナショナリズムのもとになっているのは「焦慮」⁽²⁴⁾だという見解がある。焦慮だとすれば、それは溢れる自信を一方の背景として生まれているということができるかもしれない。「中国の経済力の成長と国際政治領域における挫折感との矛盾」⁽²⁵⁾である。第三に、インターネットの普及により、ニュースが増幅され、感情的に煽る現象が一般化したこととかかわっているということである。これに第四の特徴として、それ以

前からの中国ナショナリズムの特徴が加わる。それは、「屈辱の近代とそれに対する抵抗」という近代史観である。近代以降の屈辱の歴史を再現させないという強い教育方針が存在している。いうまでもなくこれが「愛国教育」のもとになっている。近代におけるナショナリズムの発生が外来の力に対する反応であったように、現在におけるナショナリズムもまた中国が外来の圧力とみなす力に対する反応から発生しているということである。

蕭功秦は、「中国の近代以来の民族危機は『被害意識』を形成した。それは民族を富強へと向かわせる精神的資源の側面と、高度に過敏な心理の一面がある。現実的で冷静な態度を『対外的軟弱』、『宥和主義』と解説する。ナショナリズムというパンドラの箱から解き放たれた『民意』によって複雑な国際関係を解釈する基本選択にされる」⁽²⁶⁾と指摘する。この指摘の後半部分は、「中国ナショナリズムの主張およびそこに存在する内在的欠陥は深刻な結果を招くかもしれないが、より恐ろしいのは、このような思想がナショナリズム知識人の情緒化されたスローガンから国家の對外政策の基礎に転換することである」⁽²⁷⁾との指摘とも符合している。つまり、問題は「ナショナリズムの情緒化の特徴により、国家に関しての建設的な意見や問題解決方法をまったく提供できない」⁽²⁸⁾ことに留まらないということである。

中国におけるナショナリズムの理論は西洋の理論体系とどのように関わるのか。《論民族主義思潮》は「現代のナショナリズムは西洋のナショナリズムに関する知識体系に踏み込まなければならないと同時に、そこから出て具体的な環境の中で具体的な問題を探求する」⁽²⁹⁾という形で脱西洋のナショナリズムに言及している。この書では自由主義からのナショナリズム批判に対して「新西洋教条」と切り捨てている⁽³⁰⁾。

それでは、現在の中国のナショナリズムが体现しているのはいかなる意識なのか。「当代中国のナショナリズムが体现しているのは進攻心理や覇権意識ではなく、一種の焦慮」⁽³¹⁾なのだという。「憤怒」の背景には「焦慮」もあるのかもしれない。西洋の理論を退けた結果、残った部分はやはり極めて情緒的な

問題となっている。

とくに民間のナショナリズムを取り上げる際に避けて通れない問題がある。それは政府当局と民間、民衆の間の「距離」に関わることである。1949年から30年間は「ナショナリズム感情は国家の政治生活の各方面に浸透し、当局と民間の表現は一体化していた」が、90年代の民間のナショナリズムは「新中国成立後のいかなる時期の民族意識と比べても独立性と民間的色彩を備えている」⁽³²⁾との評価がある。

このように、現在、中国ではナショナリズムの出現も、民衆をコントロールしているのではないということを強調する論調がある。これらが強調するのは直接の動員ないしはコントロールをしていないというものである。しかし、このような見解への外部からの批判は必ずしも直接的なコントロールに限定されているわけではない。実際は、教育やマスメディアを通して民衆に影響を与え、それがナショナリズムを誘発しているという「迂回」形式になっているのではないかという見解も存在するのである。

同様に、インターネットの普及に関して、今よく見られる指摘に、インターネットによる情報を制御することはもはやできず、中国にも自由な言語空間ができていて、というものがある。そのような判断を下すには、中国のサイバー空間がいかなるものであり、インターネットで「自由」に流す意見のものとニュース情報がいかに生み出されるかに関する正確な現状把握が前提である。イメージだけで語られることの多い事柄であり、このような見方は広く受け入れられているように見えるので、とくに指摘しておきたい。

また、さまざまなケースがあるので、一概には言えないのだが、メディアの送り手と受け手に関する基礎的な分析が不十分なままに、最近の商業主義的傾向に重点を置き、中国の言論状況を云々するには、さまざまな前提が必要であることも重ねて指摘しておきたい。

最初にもとになるニュースがあって、揭示では多様な反射を見せているように見えて実はそのニュースの「増幅」にすぎないことがある。中国のニュース

報道に関しては、かつては報道制限が主たる論点になっており、この問題は依然として存在しようが、現在ではむしろ、中国のメディアが政府の立場を積極的にアピールすることと、報道との関係が注目される。そこでもナショナリズムが関わってくる。メディアをめぐる問題は改めて考えてみたい。

2. 「当代中国民族主義論」をめぐる

この文章は90年代後半から現在までの中国におけるナショナリズムをめぐる論争の中で議論の対象となることが多かったものである。批判者もこの文章がもっとも系統的で整っており、他の民族主義者の文章に比べて情緒化、非理性化が少ないとしている⁽³³⁾。王小東は《全球化陰影下的中国之路》の執筆者の1人であり、また、ネット上のナショナリストたちにも影響を与えているようである⁽³⁴⁾。

王は冒頭で、「ナショナリズムは古い言葉だが、近年あまり使われない。あまり使われない単語はしばしば新語の作用を果たす。人びとは耳目を一新し、その新しい内容に注目するだろう。同時に古い単語だから、一目見て大体の意味を理解できる」、「中国の現在の言語環境でナショナリズムは一種の新しい思想、1つの新しい時代をより代表することができる」、「ナショナリズムは新しい時代を切りひらく意味を含んでいる」と記している⁽³⁵⁾。

この文章では、「われわれの時代のもっとも基本的な問題」として生存空間、少数の人間が多数の人間の運命を決めることなどを取り上げ、尚武精神、エリートと平等、中国が直面する挑戦などについて、歴史的、時事的な話題を例に引きつつ説明している。この文章はナショナリズムを鼓舞する面はあるが、中国が直面している挑戦を4つの面から述べているものである。それは、(1)生存空間の狭小、自然資源の欠乏、環境の悪化、(2)科学技術の後れ、(3)政治体制改革の難度、(4)民族精神の低下、民族凝集力の喪失である⁽³⁶⁾。

王は、「戦後の自由貿易体制の下で自然資源、生存空間が重要でなくなり、いかなる人も商業の競争で勝ちを収めればよい暮らしが送れる」という考え方

に対して、「偽善を投げ捨て、地球の問題を真に厳粛に考える人はこのような明白な謬論に同意するわけがない」と決め付ける。中国内陸部の自然資源の乏しさや商業活動の難しさについて触れ、「われわれは自分の生活方式を調整して適応しなければならない。しかし、われわれは中国の多くの問題の環境制約要素をありのままに見なければならない」⁽³⁷⁾と述べ、その要素が生存空間だということのである。

そして、世界各民族を包容できるシステムとして「自然資源と生存空間の分配の平等と労働力の流動」を主張している。「自然資源と生存空間の分配の不平等」を訴え、「生存空間の問題は中国が直面する、かなり根本的な困難であると客観的に分析するもので、武力で生存空間を拡大することを主張しているわけではない」と述べ、「その体形に見合うよう自らの能力を高める」ほうがよく、中国について言えば、「中国人の中にナショナリズムと尚武精神を提唱する必要がある」⁽³⁸⁾という方向にその主張は向かう。

「世界的視角から見て、中国のナショナリズムは平等、世界大同と並行している。「中国が被抑圧民族で、弱勢群体だからである。中華民族が世界でより高い地位につき、より多くの資源を享受することはこの世界がさらに公平、平等になることを意味している」⁽³⁹⁾のだという。中国の問題点を提示した類書は少なくない。しかし、批判的トーンが強く、問題点を列挙のみで終るものが多かったが、この文章は批判しつつナショナリズムを鼓舞する。

個々の事例は独自の解釈が多く、多くの人を納得させることができるかどうかは疑問である。しかし、さまざまな批判を承知の上で提起しているように思えることが随所から窺える。時にわざと「政治的正確性」に違反しているといながら自由な雑談のような叙述を連ねる。「政治的正確性」とは「中国政治の基準に照らしての正確さ」ではなく、何家棟によると、最近 2、30年のアメリカの知識人や政治家の論壇やメディアにおける「自律」あるいは「自己規制」のことである⁽⁴⁰⁾。

ナショナリズムと民主主義の関係について、王は、「真の民族主義者は自分

の民族と国家に高い期待を持っているので、国家の富強に欠くことのできない、国内の仕事に尽力する。…彼らは国内政治の明朗に対して差し迫った追求をしている」⁽⁴¹⁾と述べている。政治思想の基本的な問題について、民主主義への支持を明確にしているといった一面をもち、ナショナリズム一辺倒に凝り固まっているわけではない。

王は80年代の中国の知識人の主流を批判する一方で、科学技術の後れなどを認め、主観的解釈だけでなく、事実を冷静に分析する視点も持ち合わせており、単なるナショナリズムの宣揚者とは違う印象を受ける部分があるのも確かである。

知識人に関しては、彼らが自分たちの民族を恨むのは改革開放以前にひどい目に遭わされたからだと述べる。改革開放以後の知識人の思想の主流に批判的で、次のように述べる。「実践が証明しているように、20年来の逆差別主義は中国の主流思想、中国のマスメディアにおいて大手を振ったが、中国の国民性を向上させるいかなる作用も果たさず、かえって中国人の自尊心と自信を喪失させ、国民精神の更なる滑落を自ずと招き、その支持者たちが唱えるような、中国の発展、中国の民主と自由に助益をもたらすことは不可能だった—この意味において、逆差別主義は自己完結したのである」⁽⁴²⁾。

自由主義と新左派の論争に関して取り上げたことがあるが、現在の中国における多くの問題に関する思想的な分岐点は、1980年前後から90年代半ばまでの思潮をいかに評価するかという問題と密接に結びついているのである。

ここに出てくる「逆差別主義」とは、彼自身の解説によると、中国人が中国文明を劣っているとみなすような考え方をいうようだが、それがなぜ80年代以降の知識人の思潮と結びつくのか。改革開放によって流入した西洋思想が一部の人びとによって「正統思想」よりも「優遇」されていたといった意味なのだろうか。

この文章に対する反論は、細かい部分についてもなされているが、何家棟がその文章の冒頭で指摘する次の点に尽きている。「『中国のナショナリストはす

すべての中国のものに賛成するわけでもないし、すべての西洋のものに反対するわけでもない』、『個人の権利は目的で、団結は手段である』、『ナショナリズムは民主主義に反対しないだけでなく、これを支持する』、『中国の未来の政治改革の方向は民主制であるべきだ』、『中国のナショナリズムと平等、世界大同は並行する』など、自らの観点を自由主義、民主主義、世界主義者と接近させているが、もっとも基本的な問題で彼は人を信服させる説明ができていない。それはすなわち、なぜナショナリズムを新たなイデオロギーの旗印として選ばなければならないかということである」⁽⁴³⁾。

何は王が引用した梁啓超の《国家思想変遷異同論》の中で、梁は民族主義について説明すると同時に、人権、自由、憲政、民主などの価値との関係でいえば、民族主義のイデオロギーは次要、あるいは従属的なものだとしていることに論及し、「梁啓超以来の中国現代史とフランス革命以来の世界史は、民主主義をイデオロギーの中心に位置づければナショナリズムはその中に当然含まれる意味合いがあるが、ナショナリズムを中心の位置に置けば、専制主義が後からついてきて、民主主義は敵対イデオロギー、政治異見者の地位に追われる」⁽⁴⁴⁾と指摘している。

王によれば、中国の問題の真相は生存空間の狭小にあり、中国思想界の左右各派の民主、自由、公正をめぐる論争は少なくとも重きを避けて軽きに就くものにすぎないと指摘されている⁽⁴⁵⁾。何は「文明か野蛮か」、「尚武精神か公民精神か」などを示し、王の観点を批判している⁽⁴⁶⁾。

民族の発展と存続を求め、尚武精神によって生存空間を拡大することが新たな極権主義支配を打破することの出来る道筋だというのが王の考え方であるが、これに対して、現在では信奉者がほとんどいないようなこの理論は、「国家間のルールは自然界の生態法則のように、力の強大なものが生存できるという『強権が公理』を決定づける」⁽⁴⁷⁾ものであり、極端な思想と人類の進歩の災いを招き、それによって新たな極権世界が生まれるとの批判がなされている。

3. 中国ナショナリズムの方向

90年代半ばからの中国ナショナリズムは何を生み出したのか。すでに「実」は存在するとの立場からは、問題点を改善しつつ、これまでの「内実」を更に膨らませていくという主張が出てくるだろう。

一方、批判的な総括もある。社会矛盾を緩和し、人々を再結集する上でナショナリズム、民族感情にある種の役割が担われたのだが、「90年代以来のナショナリズムを振り返ると、全体的に見て、合理的で民族精神を凝集し、わが国の現代化建設を促進させることのできる思想的な力を真に築き上げていない」⁽⁴⁸⁾という総括である。

さらに、国民を凝集する思想的な力を生み出さなかった代わりに、それは「一種の政治行動として中国国民の外来の圧力に対する民族感情的な反応」となり、「一種の学術思潮として国民の情緒化した行動に合法的な基礎を提供しようとし、強烈な情緒化と空洞性という欠点が明らかになり、建設性に欠ける」⁽⁴⁹⁾といった指摘もなされている。

では、なぜ中国のナショナリズムはこのような特徴をもっているのか。任丙強によれば、「前近代の文化種族アイデンティティーから国民国家のアイデンティティーへと発展せず、本能的な愛国主義から理性的な愛国主義へと発展しなかったことによる」⁽⁵⁰⁾ことにその原因がある。

現在の中国の「主旋律」は「愛国主義、社会主義、集団主義」である⁽⁵¹⁾。「ナショナリズムは必然的にいずれかの学説と共存できないのではなく、反対に、いかなる学説とも結びつく可能性がある」⁽⁵²⁾ことから、主流思想と自由主義、それぞれからナショナリズムまでの距離は一つのテーマとなっている。

ナショナリズムが自由主義をどのように見ているかについては、「ナショナリズムは自由主義が簡単に西洋に同意し、西洋の制度、文化、価値基準と道徳準則をすべて普遍化、客観化、理想化し、それによって西洋の主流イデオロギーに臣服し、中国の国家主権と民族の利益に対する思考を放棄していると考える」⁽⁵³⁾というのが一般的なイメージであろう。

これに対して、地域を限定せず、より広く一般的な問題として、「かなりの程度、ナショナリズムと共産主義との分岐は、(ナショナリズムと)自由主義との分岐よりも大きい」と述べる劉軍寧は、「(1)いかなる民族自決も個人の自決の基礎の上に立つ、(2)可能なかぎり、法律、平和、理性的手段に訴え、民族自決を実行するという2つの前提の下で自由主義とナショナリズムは共存の余地がある」と、民族自決権と個人の自決権に関して、優先順位の異なるナショナリズムと自由主義の歩み寄りの可能性を指摘する。劉が「現在において取るべきナショナリズム」としたのは「開放的で温和で理性的で個人の自決権を尊重するナショナリズム」⁽⁵⁴⁾である。

ナショナリズムの危害を避けるにはどうすればよいのか。より長期的にこの問題を考える場合、個々の論者によって、民主法治を制度的に構築していくことが重要であるとの認識が示されている。

劉軍寧は言う。「ナショナリズムの危害を避けようとするなら、ナショナリズムの客観的な存在を認めるのと同時に、民主法治の制度、自由、権利、正義などの価値および外部世界に対する全面的開放を保持することによって、ナショナリズムを制約、馴化し、その作用を一定の空間内に限定する。このようにしてはじめて、ナショナリズムの情緒がコントロールを失う局面を出現させないようにすることができる」⁽⁵⁵⁾。

こうしたことから「理性的ナショナリズム」も注目されるだろう。「民主国家のナショナリズムは極端に走りにくい、なぜなら、ナショナリズム感情の表現は法治の制限を受けるからである」⁽⁵⁶⁾。理性的ナショナリズムについて述べた呉国光はナショナリズムが必ずしも民主、自由と矛盾するとは考えていない(たとえば、呉国光「再論『理性民族主義』－答陳彦」《二十一世紀》<1997年2月号・第39期>などを参照)。理性化を進めるために自由、民主のプロセスが必要だということである。

ナショナリズムを「巨大な空洞化した記号」と表現した許紀霖は、ナショナリズムに「実」をもたせるにはどのような方法があると考えているのか。「開

放的、現代的なナショナリズムの政治内容が基本的に確立し、しかも、立憲の方式を通して共同体のメンバーに確実に自覚的に認められたときに、中国のナショナリズムは『実』をもちはじめ、安定して持久的な整合機能を備え、全民族が同意する対象となる」⁽⁵⁷⁾というのがその結論である。

どのレベルでも独自の価値と共通の価値があるとすれば、共通の価値をどのように確認していくのか。文化的なテーマとも密接に関わる内容である。徐迅は「全人類がともに認める価値基準があつてはじめて、異なる民族、ナショナリズム、ナショナリズムイデオロギーとナショナリズムの力を整合できるのである」⁽⁵⁸⁾と記している。「全人類がともに認める価値基準」へと至る道にはさまざまな問題があるだろうが、そのための冷静な努力が必要であることはいうまでもない。

注

- (1) 陳大白「民族主義的中国道路－評王小東对中国民族主義的言説」 楽山 主編《潜流对狹隘的民族主義的批判与反思》（華東師範大学出版社 2004年8月）＜以下、《潜流》＞91-92頁。
- (2) 王逸舟「民族主義概念的現代思考」 李世濤 主編《知識分子立場 民族主義与轉型期中国的命運》（時代文芸出版社 2002年1月）＜以下、《知識分子立場》＞8頁。
- (3) 孫立平「匯入世界主流文明－民族主義三題」《知識分子立場》376頁。
- (4) 房寧、王炳權著《論民族主義思潮》（高等教育出版社 2004年7月）123頁。
- (5) 《論民族主義思潮》123頁。
- (6) 「当代中国民族主義論」《戰略与管理》2000年第5期。
- (7) 《論民族主義思潮》138頁。
- (8) 同上139頁。
- (9) 徐迅「解構民族主義：權力、社会運動、意識形態和價值觀念」《潜流》259頁。
- (10) 任丙強「90年代以来中国的民族主義思潮」《潜流》9頁。
- (11) 余建華《民族主義 歷史遺產与時代風雲的交疊》（学林出版社 1999年）11-13頁。
- (12) 徐迅「解構民族主義：權力、社会運動、意識形態和價值觀念」《潜流》245頁。
- (13) 同上250頁。
- (14) 同上247頁。
- (15) 孫立平「匯入世界主流文明－民族主義三題」《知識分子立場》375頁。
- (16) 任丙強「90年代以来中国的民族主義思潮」《潜流》12頁。

- (17) 《論民族主義思潮》110頁。
- (18) 許紀霖「中国的民族主義：一個巨大而空洞的符号」《潜流》43頁。
- (19) 《論民族主義思潮》125頁。
- (20) 同上128頁。
- (21) 同上96頁。
- (22) 孫立平「匯入世界主流文明—民族主義三題」《知識分子立場》377頁。
- (23) 《論民族主義思潮》4頁。
- (24) 同上127頁。
- (25) 任丙強「90年代以来中国的民族主義思潮」《潜流》12頁。
- (26) 《國際先驅導報》2004年121期「中国民族主義憤青調查 極端民族主義：愛国還是誤国」。
- (27) 任丙強「90年代以来中国的民族主義思潮」《潜流》24頁。
- (28) 同上22頁。
- (29) 《論民族主義思潮》127頁。
- (30)(31) 同上127頁。
- (32) 同上128頁。
- (33) 任丙強「90年代以来中国的民族主義思潮」《潜流》20頁。
- (34) 同上14頁。
- (35)-(39) 王小東「当代中国民族主義論」《戰略与管理》2000年第5期。
- (40) 何家棟「中国問題語境下的主義之爭—就“中国民族主義”与王小東商榷」《戰略与管理》2000年第6期。
- (41)(42) 王小東「当代中国民族主義論」《戰略与管理》2000年第5期。
- (43)(44) 何家棟「中国問題語境下的主義之爭—就“中国民族主義”与王小東商榷」。
- (45) 王小東「当代中国民族主義論」《戰略与管理》2000年第5期。
- (46) 何家棟「中国問題語境下的主義之爭—就“中国民族主義”与王小東商榷」。
- (47) 任丙強「90年代以来中国的民族主義思潮」《潜流》15頁。
- (48)(49) 同上29頁。
- (50) 同上22頁。
- (51) 《論民族主義思潮》142頁。
- (52) 任丙強「90年代以来中国的民族主義思潮」《潜流》26頁。
- (53) 《論民族主義思潮》147頁。
- (54) 劉軍寧「民族主義四面觀」《潜流》269頁。
- (55) 同上271頁。
- (56) 同上269頁。
- (57) 許紀霖「中国的民族主義：一個巨大而空洞的符号」《潜流》48頁。
- (58) 徐迅「解構民族主義：權力、社会運動、意識形態和價值觀念」《潜流》262頁。